

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	基本理念「ほっとハウスのおひさま暮らし」を玄関、事務所に掲示して共有出来るようにしている。また、全体会議、職場内研修、個人面談などの際に理念について確認している。	理念の共有と実践に向けて、各々職員が、基本理念を基に年間の行動目標を作成し、年2回の面談で振り返り等を行って、実践に繋がられるよう努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	年に数回の行事を通して、保育園児や民生委員、ボランティアの方々との交流、福祉学校の生徒や高校生のボランティアを受け入れ、楽しまれていたが、コロナウィルス感染対策のため制限があり、今は交流を自粛している。	コロナ禍により、法人内の学校を除いて、外部との交流機会がなくなっていたが、コロナの5類移行に伴い、コロナ前に実施していた保育園や学校、ボランティアなどの受け入れ、交流を徐々に再開していく予定となっている。	コロナ禍でも工夫して外出を継続されていた。5類移行により、更にコロナ前の取り組みに順次戻されることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	地域の民生委員の方々から、認知症の人の理解や支援の方法について話を聞きたい教えて欲しいと依頼があったが、コロナウィルス感染対策のため実現出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	2か月に1回開催し、行政・区長・民生委員・利用者代表家族が参加されている。施設の現状、利用者の状況、活動報告等の説明をしている。コロナウィルスの感染状況によっては開催を見合わせる事もあり、文書でお知らせした回もある。	運営推進会議が再開され、2ヶ月に1回開催されている。市の介護保険担当者、区長、民生委員、利用者家族代表が出席されている。直近の会ではコロナの5類移行に伴う面会方法やボランティアの受け入れ、マイナンバーカード等に関する意見が出され、運営に反映された。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	運営推進会議、介護認定調査、生活保護の方への面談等、行政の方が来所された際に事業所の日頃の様子を見て頂き、情報交換をしている。時にはアドバイスをもらっている。	運営推進会議が再開され、2ヶ月に1回、市の介護保険担当職員と直接顔を合わせて話し合う機会が持てるようになったことから、施設の内情を知ってもらい、連携が深まるように努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	内部研修や勉強会を行い、意識の共有化を図っている。身体拘束や言葉の拘束等を含めて職員同士で注意合っている。玄関の施錠はしない事を常とし、やむを得ない場合以外、職員との連携の中で開放に努めている。	今年は身体拘束に関する研修が6月と来年2月の年2回計画されている。研修後も勉強会を行うことで情報を共有し、更に実践に繋がられるよう取り組みされている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	虐待防止法関連法については、全体会議でも勉強会を設けて意識を深め、防止意識を高めている。実施例として、入浴時等、外傷がないかチェックし報告、原因究明に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	成年後見制度については、行政機関の行う説明会に参加し、理解を深めている。ご家族が高齢となり、今後について不安の訴えがある時等、成年後見制度がある事を伝え、行政に相談する事をお勧めしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約時には「利用するための契約」「身体拘束」等、契約書類を分けてわかりやすく説明できるように配慮し、時間をかけて説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	運営推進会議や各種行事の内容を盛り込んだ「ユニットたより」を毎月1回発行し配布している。ご家族の面会時や家族会、クリスマス会の際に内容についての評価・意見・要望を伺い、全体会議で反映させている。	面会の制限下でも、施設での生活の様子が少しでも分かるよう、月1回のお便りはカラー写真を沢山使い、利用者ごとに内容を記載。運営推進会議の議事録も毎回送付している。最近では家族から挙がった面会に関する要望について運営に反映させた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	平成28年度より人事考課を導入し、職員は年2回の自己評価をして面談を行っている。個別面談、全体会議、ユニット会議等で意見が反映できる環境となっている。	人事考課制度による年2回の職員面接や月1回のユニット会議の場等で、職員の意見や提案を話せる機会を設け、管理者が中心となり反映出来るように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	人事制度による賃金規定を作成し、個々の努力や実績、勤務状況により昇給、昇格を行い、各自が向上心を持って働ける制度がある。また、定年退職後の職員が個々の雇用契約で延長し、経験を活かした働き方も取り入れている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	毎月職場内研修を行っている。研修テーマは介護現場で必要な研修はもとより、当該ホームで必要とされる研修を随時取り入れている。希望者は外部研修も参加できるように働きかけている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	弊社別グループの事業所職員と交流を図ったり、外部研修等で他事業所の方と意見交換が出来るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	入居前に本人と面談を行い、性格等の把握に努め、入所1か月程は特に配慮をし、様子を見守りながら関係性を構築し、気持ちを引き出せるようにしている。情報の共有化を図り安心・安全に繋げている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	家族の方に今までの家庭での生活の様子を伺い、グループホームでの生活との違いをご理解頂き、家のような生活を継続できるように、本人や家族の不安・要望に沿える関係づくりを行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	入居時に現状を十分にお伺いして、当ホームの説明と他の施設との違いを理解していただき、状況により他の施設を紹介することも考えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	笑顔を決やらず、利用者様主体で「おひさまな暮らし」を合言葉として寄り添い、優しく支援をし、穏やかな暮らしが保てるよう、利用者との関係に努めている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	毎月の「おたより」に利用者の日常の出来事や生活の様子をお知らせして、家族との一体感を失わないように努めている。コロナ感染症で対面での面会は出来ていないが、ガラス越しの面会や電話での対応をお勧めしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	コロナ感染症で外出にも制限があるが、毎月の行事や昔からの習わしを続け、会話の中で馴染みの生活の様子を話していただけるように心掛けている。	コロナ禍で外出に制限があるなかでも、馴染みの生活が損なわれないよう、七夕まんじゅう作りなどの地域に伝わる昔からの習わしを年間計画に入れるなど、取り組みをされている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者同士、仲の良い仲間に合わせて席を考え、穏やかな交流が出来るように雰囲気作りに努め、コミュニケーションが図れる関係を支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	他施設、他事業所へ入所された場合でも、ご家族にお会いする機会があれば、失礼のないように様子を伺ったり、その後も相談に応じている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	居室で過ごされている時や日常の会話の中で、ここでの生活の要望、意向や希望を丁寧に聞いて、思いに沿えるようにしている。情報をカンファレンスに繋げている。	担当の職員が中心となり、常に利用者との日々の関わりの中から思いや意向の把握に努めている。最近もカップラーメンがどうしても食べたい、という利用者に食べられる機会を提供することがあった。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入居時に本人の意向を大切に、家族や居宅・サービス事業所と連携し、生活歴・サービス利用歴等を聞かせていただき、これまでの暮らしの継続性とニーズの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	日々の様子を観察し、職員同士の引き継ぎを大切に現状の把握に努めている。毎月実施しているケース検討会で情報の共有をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	ユニットリーダーと職員は、利用者の日常の様子の把握に努め、ユニット会議で評価を行い、介護計画を見直し改善を図っている。本人、家族の意見がプランに反映しているかを面会時等に伺い、同意を得ている。	担当の職員とケアマネージャーが中心となって、本人や家族の思い、希望等を、かかりつけ医の医師や看護師、法人内の理学療法士や作業療法士等を加えたチームが情報を共有し、介護計画の作成、見直しに取り組まれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	生活記録やケアプランの実施記録には日々の気づきを書き入れて、職員間で情報を共有し介護計画に役立てている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	ご家族の面会や電話での問い合わせがある時に、ご本人の希望や思いをお話しして、希望などを取り入れられるよう取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	地域の区長・民生委員の方々の協力を得て地区公民館活動に参加し、安全・安心な暮らしに協力を頂いている。保育園児と交流したり地域の方から自家栽培の野菜等を頂いたり、地域と利用者との関係作りが出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	かかりつけ医は、入所時に本人・家族に選択して頂き、適切な医療が受けられるように家族にも協力をお願いしている。職員も情報を共有して、受診後の様子を伺い必要に応じた対応をしている。	かかりつけ医は、利用者・家族の意向で選ぶことができる。協力医院の往診が月2回、看護師は週1回訪問している。受診の付き添いは家族対応となるが、受診時は施設が、心身状態や様子等を書面にまとめたものを用意し、フォローに努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	医師の往診(月1回)と毎週水曜日に看護師が勤務している。その際に利用者様の様子を伝えていく。変化のある時には電話等で相談して、対応方法を教わりながら必要に応じた介護をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	管理者や職員が面会に行ったり、ご家族に状況をお伺いしたり、医療機関と情報共有して、利用者様が困らない関係づくりが出来るように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	契約時に看取りの指針について説明し同意を得ている。利用者様の状況に応じて、主治医・本人・家族と話し合い、グループホームで出来る事を理解し納得して頂き、看取りに取り組んでいる。	看取りの指針があり、入居時に終末期への対応方針を説明している。その後も利用者の体調変化等により、状況を見ながら主治医、本人、家族との話し合いがもたれ、情報を共有し、終末期に向けた支援に取り組まれている。今年度は1名の看取りが行われた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	年間研修計画の中に急変時の対応・緊急時の対応について計画し、勉強会を行っている。利用者様の予測される急変については職員の中で情報共有を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	年2回の昼夜想定避難誘導訓練を実施している。地域の方を交えた消防署員による避難誘導訓練指導を6月実施。夜間想定訓練は9月に実施。	年2回の防災訓練が実施されている。今年度は6月に消防署員立ち合いの避難誘導訓練が実施され、9月には夜間想定避難訓練と非常災害時の対応・緊急時対応の研修が計画されている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	利用者様が人生の先輩である事を忘れずに、明るく和気あいあいとした生活の中で尊厳を大切に、一人ひとりの表情や目を見ながら丁寧に接することを心がけている。排泄や入浴時等、プライバシーを損なわないよう言葉かけに配慮している。	管理者が中心となり、日々の介護の中での言葉掛けや対応等について、プライバシーに配慮し取り組まれている。虐待やプライバシー保護に関わる研修が年1回行われている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	声かけや会話を大切に、ご本人の意向を伺いながら、希望があれば無理のない範囲で対応する。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	毎日の体調や様子を伺い、見守りし、日々を穏やかに安心して過ごして頂けるように支援している。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	着替え等は自分で選んで頂くようお願いし、本人の意向を大切にしている。いつも清潔でいられるように支援している。訪問理容にて希望のヘアスタイルにカットをしている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	利用者様の力量に合わせて食事の準備や片付けを手伝って頂いている。自発的に手伝って下さる方もおり、職員と一緒に楽しんで出来ている。日曜日の昼食は利用者様の希望を聞いて食事作りをしている。	利用者は、各々の力量に合わせて配膳等の準備、下膳等の作業を職員と一緒にしている。毎週日曜日は利用者の希望を聞いてフロアで昼食を作っている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	一人ひとりの希望や状態に合わせて、摂取量・水分量の確認をし、必要に応じてチェック表に記入を行い経過観察をしている。食形態や盛りつけにも工夫をし配慮している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後声かけ誘導し、口腔ケアに付き添い、見守りながら実施している。本人の意志や意欲を取り入れたケアをしている。訪問歯科の受診や相談も行っている。			

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	排泄チェック表を基に、一人ひとりの排泄パターンを把握するように支援している。「出来るだけトイレで排泄を」を目標にして、タイミングをみて声がけ誘導している。	排泄チェック表の記録を用いて、一人ひとりの排泄リズムを把握し、失禁せず出来るだけトイレで排泄できるように支援されている。それによりパットの使用量を減らしたり、紙パンツから布パンツに移行できた利用者もいた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	排泄チェック表を利用し、便秘予防に食材の工夫をして牛乳・ヨーグルトを取り入れたり、適度な運動や歩行訓練を行ったりしている。必要に応じて医師に相談し、下剤服用で調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	利用者様の希望を確認しながら、1週間に最低2回以上は入浴出来るようにし、健康状態や精神的な面も見極めて、入浴支援をしている。	一人ひとり、おおよその入浴日は決めているが、無理強いはず、本人の体調や気分に合わせて、臨機応変に柔軟な対応をされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	夕食後の就寝時間は自由で、一人ひとりの思いで居室に戻り休まれる。一人ひとりの睡眠時間に合わせて、室温や寝具の調整をするように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	薬係を主に、職員が薬の変更や服薬について情報を共有し、理解するために申し送りノートを活用して、誤薬がおきないように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	一日を通して食器拭き・洗濯物を干す・たたむ・モップがけ等それぞれの役割を持って生活出来るように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域のみなさんと協力しながら出かけられるように支援している。	コロナ感染症で外出にも制限がある中で、感染リスクの低い事を探し、広い畑でのりんご狩りに出かけたり、キッチンカーに来てもらい、お洒落なサンドイッチを食べて外食気分を味わってもらおう等、楽しんで頂いた。	コロナ禍で制限がある中でも、契約しているりんご農園へりんご狩りに行くなど、感染リスクの低い屋外等への外出が継続されてきた。また、日常的に施設周辺への散歩が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	家族よりお小遣いとして持って来て頂いている。お小遣いは基本的に施設で預かり、本人・家族の希望で使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	家族に電話をかけたいと希望があれば、自由に電話が出来るようにしている。年末には職員と一緒に年賀状を書いて頂くようにしている。昨年末は顔写真を貼ってご自分で文章を書いた年賀状を出した。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	天気の良い日には、中庭に出て体操や外気浴をしたり、余暇活動で作成した作品をホールの壁や玄関に飾ったり、季節にあった装飾を行っている。空調等は利用者様に合わせて温度や明るさに気を配っている。換気は時間を決めて行っている。	日中入居者が集うフロアは、窓が大きく明るい印象。広さもあり開放感がある。床、壁の腰板部分が濃い木目調で落ち着いた雰囲気をしており、居心地の良い空間作りがされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	共用のホールでは、ご自分の思いに沿った居場所の提供と馴染みの関係が出来るように、食事の席を配慮している。一人ひとりの思いを伺って楽しい雰囲気づくりをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室には、入居前の生活の継続性を大切にして馴染みの家具・置物・写真・趣味の物等を置き、居心地よく過ごせるように配慮している。	居室には、自宅で使っていた家具や思い出の品々が持ち込まれており、写真等も飾られていた。本人が居心地よく過ごせる配慮がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	共有スペースにはなるべく障害物を置かないようにしている。自室の入口には本人に確認をとり、わかるように大きな字で名前を貼ってある。トイレ・浴室も大きな字で明記している。		